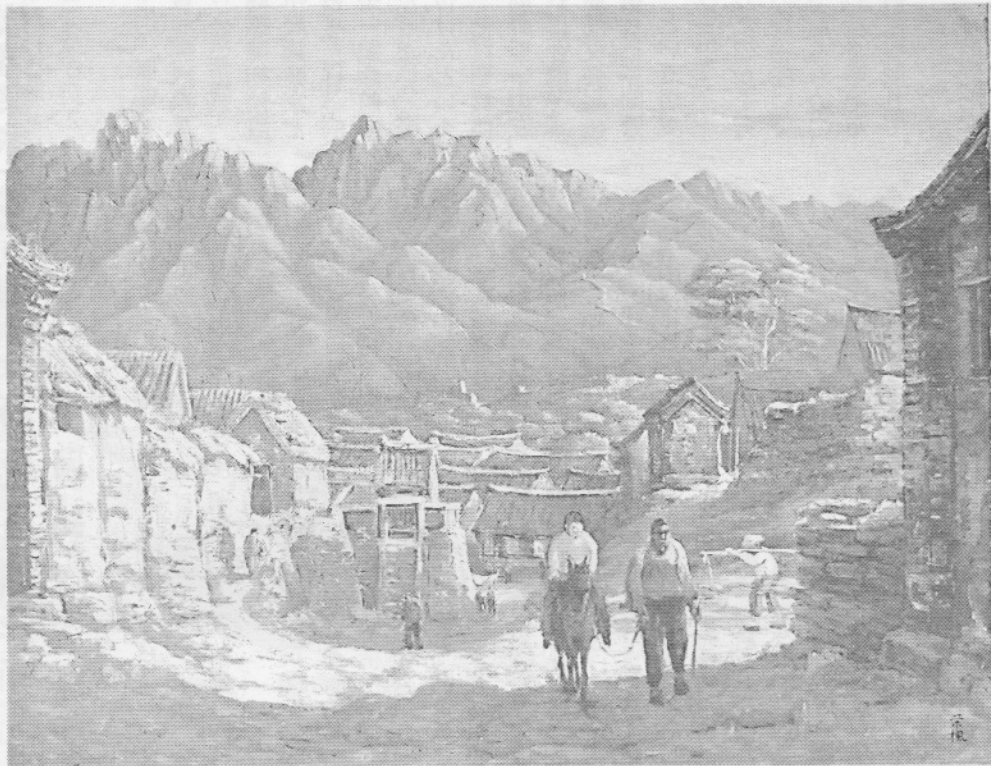


郷土直方

直方郷土研究会・会報39号



満州風景(旧日満学校蔵)

目次

筑紫洋行(筑紫辨館)と天津の商品陳列館設立計画

向野康江…2

明治を生きた直方の人たち(下)

日隈精二…6

日満学校の歴史

榊正澄…9

食べ物随筆・喫茶ダリアの思い出

金山輝代…14

郷土の女子教育の先駆者・大和クニ

牛嶋英俊…15

・会員消息

編集部…18

直方の俳人一萍について

千々和昭男…19

直方市下境地区の旧炭坑住宅街(連載一)

篠原義一…20

・事務局報告

編集部…22

紫村一重「竹槍一揆の軌跡」(連載二)

直方郷土研究会…23

資料紹介・鶴澤燕絲(大和良造)碑

国友千昭
牛嶋英俊…29

・編集後記

30

筑紫洋行(筑紫辦館)と天津の商品陳列館設立計画

「九州炭鑛業家」と向野堅一の動向に注目して

向野 康 江

一 本稿での課題

本稿では、向野堅一(こうのけんいち・一八六八〜一九三二)に着目しながら、筑紫洋行(筑紫辦館)以下、筑紫弁館と記す)設立と天津の商品陳列館設立計画について論及したい。特に、九州炭鑛業家と向野堅一の関係の有無を明らかにしておきたい。向野堅一の経歴については、すでに向野堅一記念館のHPに掲載しているので参照していただきたい。堅一が九州炭鑛業家たちから支援を取り付けたという伝聞が以前から存在していた。しかし、それを具体的に立証する論はなかった。そこで、向野堅一の友人であった郡島忠次郎(向野書簡によれば郡嶋、本稿では郡島で表記)が語った記録(東亜同文会『統対支回顧録』下巻、昭和十六年)を手掛りに、向野堅一がいつ、どこで、誰と会ったのか、という事実関係を把握することにした。

同時に、何のために支援を得ようとしたのかを考察する。また、孫文と向野堅一との関係については、どこで会ったのか、今のところ不明であるものの、孫文と親しかった安川敬一郎との接触した時期が明確になってくるので、孫文のことについても触れておく。これらが本稿での課題である。

二 天津の商品陳列館設立計画

(一) 「奉天 茂林館 向野堅一君」の記事

「支那在留邦人興信録」(東方拓殖協会、一九二六年)に、向野堅一について紹介した部分がある。以下は、



写真1 向野堅一(28歳ころ)

その一部分である。

二十九年一月台湾總督府通譯となり混成第七旅團に屬し、土匪討伐に従軍。同年十月、友人河北純三郎氏と共に北京に入り筑紫辦館を設け、公使館の用達商となり傍ら和洋雜貨の販賣店を營業す。日本人にして北京に商店を開設したるは君を以て嚆矢となす。君、天津に日本商品陳列館設置の必要を認め、三十二年歸朝して朝野の當路者に遊説勸告し、遂に九州炭鑛業家の贊助及び出資の承諾を得。外務省の許可を受け政府よりの保護金も亦漸く確定したる時、三十三年義和團の變亂に際し、君の經營に係る筑紫辦館は此等匪徒の爲めに焼失の不幸に遭遇したるのみならず、其留守主任たりし中村秀次郎氏は義勇兵に加はり戦死したる等、災厄踵を接して臻り止を得ず多くの債務を負ひ、半途にして廢業し、更に第五師團監督部の用達商となり、天津に入り有馬組北部の主任となる。(一九五、一九六頁、句読点は本稿執筆による)

この記事によれば、河北純三郎と向野堅一たちは天津に日本商品陳列館を設置しようとし、明治三十二年帰国して官・民における関係者たちを説得して廻っていたことになる。「九州炭鑛業家」とは誰のことか。実は、貝島太助と安川敬一郎のことである。そこで、向野堅一友人・郡島忠次郎が語った記録(東亜同文会『統対支回顧録』下巻、前掲)を探った。

(二) 郡島(郡嶋) 忠次郎の苦心談

郡島は、明治三年十月十九日、福岡県糟屋郡篠栗町の郡島甚次郎の次男として生まれた。粕屋中学校を卒業後、明治十九年に福岡の養銳学校に入学した。このとき、鐘崎三郎や石橋禹三郎らと知り合う。翌年の明治二十年には、金子堅太郎、明石元次郎らを輩出した正木昌陽塾に入塾して漢籍を修めた。その後、簿記学校で簿記を学び、長崎で簿記、漢学の教師をしていた。明治二十二年、長崎市商業会議所で荒尾精の日清貿易研究所生徒募集の講演があった。長崎に来ていた鐘崎とともに上海に渡った。明治二十三年九月に学校に相当する日清貿易研究所が開設され、郡島は白岩龍平と同じ三組(三班)に入った。このとき向野堅一と郡島忠次郎は出会う。卒業後、二人とも上海の商品陳列館に入所した。この商品陳列所は深刻な経営不振となった。打開策を見つけようと東京で角田隆郎と奔走していたときに、日清戦争が勃発した。この戦役では第二軍司令部付、第二野戦隊付通訳官となった。日清戦争終了後は台湾に通訳官として赴いた。ここまでは向野堅一と行動が同じである。

『統対支回顧録』下巻によれば、明治三十二年、郡島は笹栗炭鉱の採掘権を巡る抗争を解決中であった。ちょうどそのころ、日清貿易研究所同窓生であった河北純三郎、向野堅一、香月梅外が天津に商品陳列館を開設する計画を立案し、郡島とあわせて四名の

連名で趣意書を作成した。当初、郡島は名前を貸すだけという約束であった。いよいよ準備が始まると準備費用の調達・資金集めに奔走、ついに貝島大助・安川敬一郎・平岡浩太郎の賛助を得ることに成功した。この資金援助要請については次のような苦心談を郡島は残している。内容は下記の通り。

- 1 河北の天津商品陳列館の趣意書が実に拙い文章だったので末永純一郎(末永節の長兄)に筆を入れてもらった。
- 2 趣意書を印刷する金がなかったので、郡島の時計を質に入れて印刷を済ませた。
- 3 この趣意書で二万円を金持ちから引き出すことにした。
- 4 十二月ごろ、まず郡島が河北をつれて貝島が宿泊していた馬関旅館を訪れた。貝島は「自分は良事と思うが、支那がわからぬから、安川が賛成したら私も賛成する」という返事であった。
- 5 運動費は平岡浩太郎の弟・常次郎から百円の無心をした。
- 6 今度は安川を若松に訪ねた。安川は何を言ってもジーツと無言で実に薄気味悪かった。
- 7 博多に帰った際、河北は「安川が賛成せぬと成立せぬ」と悲観した。
- 8 翌年の春、笹栗の一件で向野と上京した際、やっとな安川の賛成を得て押印してもらった。
- 9 東京では、平岡の入れ知恵で農商務省(藤田次官、木村商工局長)に働きかけ、年額二千元の補助を受けるまでに話は発展した。
- 10 ちょうど矢野文雄に会った。一度どこかで役人に御馳走せよと言われたので、たしか湖月で御馳走したはず。
- 11 その時、竹芝館に島田経一がいて、隣室に孫逸仙がいた。私(郡島)も二、三回ほど会った。(五二七頁要約)

明治三十二年の二万円はかなりの金額である。これを貝島や安川から融資させようとしても、彼等がすぐに首を縦に振らなかったのも当然であろう。この時期、貝島大助も安川敬一郎も炭鉱業確立に専念していた。郡島が河北をつれて馬関旅館を訪ねたとき、貝島が「支那がわからぬから、安川が賛成したら私も賛成する」という返事をしたのは、どのような意図によるものなのか。

当時貝島よりも安川の方が鉱業規模ならびに資産規模が大きかった。安川は若松に住んでいた。「安川敬一郎日記」第一巻(北九州市立自然史・歴史博物館、二〇〇七年、以下、「安川日記」と記す)によれば、明治三十二年十二月は一、三日、十七、二十一日、二十四、三十一日まで若松に滞在していた。訪ねたとなればこの期間内である。

河北の話では「翌年の春」となっているが、明治三十三年の新春に郡島と向野堅一がともに行動していた記録が中村義「白岩龍平日記―アジア主義実業家の生涯」(研文出版、一九九九年、以下「白岩日記」と記す)に存在する。記述者は白岩龍平である。

一月十六日 火、(前略)一時半到門司千住迎款酒飯、偶郡島、向野通刺来会、不与郡島見者二年病在肺肝而容□意氣不甚衰出意想之外爲之一喜(三五〇頁)

これによれば、向野堅一たちは門司へ白岩に面会するために行っている。奇しくも同年一月六日の「安川日記」には、博多に滞在していたことが記されている。翌日に門司に向き、八日に帰宅したが、九日には大阪(大坂)へ出発し、十四日に大阪から東京へ出発、十五日から二十日まで上京している。向野堅一と会った可能性が高い時期は、一月十五、二十日、二十六、三十一日、二月一、二十八日、三月一、四日、五月二十四、三十一日である。

明治三十三年の「安川日記」に河北・向野・香月・

郡島、孫文(中山樵)らの記述は見出せないものの、「白岩日記」によれば、孫文が明治三十三年二月二十四日から三月五日までは東京に滞在していたことは確かである。孫文と島田経一が竹芝館に滞在し、郡島が孫文に二、三回ほど会ったのであれば、郡島と堅一が安川と面会したのは二月二十八、三月四日の間と特定できる。向野堅一も孫文に会ったのかもしれない。ただし断言できない。

『支那在留邦人興信録』(前掲)の「九州炭礦業家」とは安川や貝島のことであり、彼らの融資確約を得て外務省の許可も受け、平岡浩太郎のアドバイスで農商務省に働きかけ、年額二千元の補助を受けるまでに話は発展したことが「政府よりの保護金も亦漸く確定した」ことを指す。では、なぜ河北・向野・香月が天津に商品陳列館を開設しようとしたのであろうか。実は、この三名は明治二十九年にすでに筑紫弁館を開店していた。その筑紫弁館はどのような経緯で設立されたのであろうか。

三 筑紫弁館(筑紫洋行)の設立

(一) 筑紫洋行の「総則」案
『統対支回顧録』下巻によれば、日清戦争後、対支事業に先鞭をつけたのが白岩龍平一派による新利洋行と、向野堅一・河北純三郎・香月梅外の筑紫弁館であった。前者は「追加日清通商航海条約」により獲得した「内河航路権」を行使して、大陸の広大な河川を活用しながら大陸貿易を推進しようするものであった。後者は北方の首都を基盤にして大陸貿易の実権を握ろうとする野心をもっていた(四一〇頁)という。筑紫弁館とは筑紫洋行のことである。

佐々博雄の「日清戦争後における大陸「志士」集団の活動について―熊本国権党系集団の動向を中心として―」(「国士館大学文学部人文学会紀要(二七)」(一九九四年十月、四十五、六十一頁)によれば、「筑

紫洋行は福岡出身の乙未同志会会員でもあり日清貿易研究所卒業生の河北純三郎、香月梅外、向野堅一らによって、明治二十九年十二月、北京に設立された貿易会社である」と記述されている。筑紫洋行は筑紫弁館とも呼ばれたようである。ただし向野堅一の認識では筑紫弁館ではなく筑紫洋行である。

実は、向野堅一記念館に筑紫洋行に関する「総則」(写真2)が残っている。そこには香月の名はなく、代わりに戸田義勇の名がある。戸田は筑後久留米の藩士・戸田乾吉の三男として、明治二年一月三日に久留米市で生れた。東京商船学校を退学して明治二十四年秋に一年後れで日清貿易研究所に入り、二十六年七月に卒業した。もちろん向野堅一たちと同様、日清戦争に通訳官として召集され、三十一年には台湾総督府法院の通訳になっている。帰国後、土木請負の支岐組の会計主任になり、三十三年の義和団事件のときにも支岐組員として鉄道工夫百五十名を引率して渡航している。筑紫洋行に従事していたとは考えられない。香月の記述によれば、中国大陸河南産の竹皮を下駄の表に製造の仕事を始め、昭和四年一月十九日、六十一歳で逝去している。「総則」には「本商店は明治二十九年八月十四日を以て開設す」とあるので、筑紫洋行が御用達店であることから世間では筑紫弁館と呼んだということが考えられる。

向野堅一の自筆の履歴書によれば、明治二十九年十月に北京日本公使館用達店として筑紫洋行を開設のため渡清し、三十三年六月に義和団事件のため筑紫洋行を焼かれたので商店を中止した、とある。やはり「総則」は堅一による草案で、堅一は最初から筑紫洋行と命名し、実直な戸田義勇を仲間に入れようとしたのではなからうか。しかし、香月梅外が明治三十九年に向野堅一宛てに認めた書簡では筑紫弁館と記されている。いずれにせよ、明治三十一年に

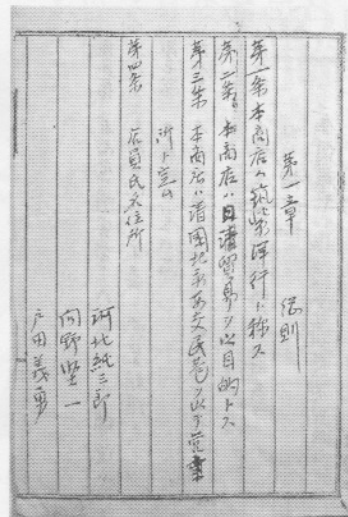


写真2 筑紫洋行の総則

は筑紫洋行と呼ばれていたことに相違ない。

近衛篤磨日記刊行会「近衛篤磨日記、付属文書」(鹿島研究所出版会、昭和四十四年)のなかに「同文会設立趣旨書」と題し、傍註に「明治三十一年か。白岩竜平筆」と記された書類が収録されており、既設の事業に「北京に筑紫洋行あり。(中略)現に在清の同志者(中略)筑紫洋行 河北純三郎 同 香月梅外 同 向野堅一(中略)以上は現に清国に在りて民間事業に従事せるものに係る。(四〇一、四〇二頁)」という記述がある。この筑紫弁館(筑紫洋行)は河北純三郎による発案であったと『続対支回顧録』下巻には記述されている。

(一) 河北純三郎による発案

『続対支回顧録』下巻によれば、河北純三郎は、明治五年九月四日に福岡県浮羽郡山春村の河北俊藏の次男として生まれた。初めは福岡中学に入学、その後、神田共立学校で学び、明治二十三年に日清貿易研究所設立の講演を聞いて、同年九月、同研究所に入學した。卒業後は商品陳列所で実地練習をしていた。つまり、堅一とともに日清貿易研究所で学び、上海で実地練習をした仲間である。日清戦争時には第二軍に属し、旅順陥落後に兵站監部へ移動、亮甲店兵

站部などに勤務した。日清貿易研究所の学生生活を綴った「高橋正二日誌」や「宗方小太郎日記」、「向野堅一日清戦役従軍日記」において、常に堅一の身近な人物として登場する。この河北が筑紫弁館設立のきっかけをつくることになり、

君(河北)が内地旅行中、北京に於て小村代理公使(小村寿太郎)に面會した序でに、日本人で北京に商店を開く事が出来るや否やを尋ねた所、代理公使は「英國のハンダリーや獨逸のインベツクスも公使館御用商として現に開店して居るのだから、日本人にだつて出来ない事はあるまい」との答を得て居る。戦後君(河北)は向野堅一・香月梅外等と謀り愈々北京に進出するの義を決した。其頃北京公使は林董時代であつたので、君は同公使赴任の後を追ふて北京に入り公使館御用商人として開店の事を懇請したが、林公使は中々それを聽かなかつた。併し幸にも當時北京駐在武官であつた少佐神尾光臣の居中調停で「一時に六十個以上の貨物」と云ふ條件の下に漸く許可となり、君(河北)と向野堅一とが商品仕入に奔走し、香月梅外が開店準備として北京に向かつた。然るに其後に至り林公使が商店開設を許可したことはないと言ひ出したが、兎も角も東交民巷に開店を實行した。之が即ち筑紫弁館の誕生である。(『続対支回顧録』下巻、五三六頁)

(二) 香月梅外による準備

香月は明治二十九年の九月に筑紫弁館開店準備のために北京に入り、堅一と河北は、商品の仕込みに京阪に赴いた。手分けして創業に奔走した結果、十二月に北京交民巷の各国公使館街に開業するに至った。しかし当時は、清国政府は北京における外国人の営業を禁止していたため、筑紫弁館は日本公

使の許可を得て御用商人として開業した。弁館とは、資格を得た御用商のことを指す。ただし、この弁館は簡単に生まれたものではなかった。香月梅外の話によれば、そのときの事情は次のとおり。

私(香月)が北京に着いて見ると状況は一変して居た。林董公使は筑紫弁館の開業など承諾した覚えはないと云い出され、又家主の李姓も河北が来られた時は営業不振で、あの場合貸借の約束をしたには相違ないが、今は商売も順調に復したので譲ることも貸すことも出来ないかと拒絶され、私(香月)としては立つ瀬もない苦境に陥いたのであるが、その内に林公使は露国に転任し、矢野文雄が後任に据り、内田一等書記官が公使着任迄代理公使となられたので、私(香月)は実に蘇生の思ひをなし、準備を進めると、向野、河北は商品と共に十二月着京し茲に開店を完了した。云々(『統対支回顧録』下巻、四〇二頁)

この記録を残した香月外梅は、福岡県選出代議士香月惣経の次男である。香月惣経の詳細については田中正志『香月惣経翁小伝』(香月惣経翁顕彰会、一九八一年)が詳しい。香月梅外は明治八年一月三十一日に朝倉郡三輪町で生まれ、十六歳で日清貿易研究所に最少年者で合格した。二十六年七月に卒業後、河北や向野とともに上海の商品陳列所で修学した。日清戦争従軍のときには、第一師団下乃木旅団司令部に配属された。『向野堅一従軍日記』においても香月に関する記述は多い。

四 日清戦争後の不況

筑紫弁館すなわち筑紫洋行がどのような経緯で設立されたのかは、上記のとおりである。ではなぜ、河北・向野・香月は天津に商品陳列館を開設しようとしたのであろうか。香月は、明治三十一年にこの筑紫弁館を罷める。罷めて白岩龍平が経営する大東

新利洋行に入社し、以後、三十九年まで勤めている。なぜ、香月が筑紫弁館を罷めたのかは明確でない。かつての同僚である香月とともに、再び三人で明治三十二年、天津に新たな商品陳列館を開設しようとしたことになる。

向野堅一が白岩龍平に、小村寿太郎より矢野文雄へ依頼してくれるよう要望し、その返事を白岩が向野堅一に宛てた書簡が残っている。

御書面拜誦仕候。大坂(阪)ニテ御再會ヲ相期シ居候処僅カ一泊シテ急ギ出發仕候為取モノモ取敢ヘズ何レヘモ御無沙汰仕候始末幾重ニモ御諒恕奉願上候。其ノ御申越相成候小村次官へ御紹介ノ儀ハ小生ノ微力ニテ及候事ナレバ何ナリトモ致スベク候得共、同次官ハ今回初メテノ面識ニテ心キト云フ迄ニモ無之就テハ一封ノ書面ヲ以テ依頼致候事如何ト被存申候。若シ貴兄御上京ノ御モ有之候ハハ直接御面會御依頼相成候事都合宜敷奉存候。同氏ハ淡泊簡直ノ質ニテ我々ノ話シハ至極致シ易キ人故御面談相成候へバ矢野公使へ依頼ノ勞ヲ取ルベクト奉存候。若シ左様御取相成様ナレバ小生ヨリ一番詳細ニ相メ御面會迄ノ御紹介可申上候。御賢考如何御伺申上候。河本磯平兄皮膚病治療ノ為過日来佐賀古湯ニ療養中、自然全治ノ上ハ御地方ヲ漫遊ノ上帰申ノ筈ニ御座候。御令夫人へ宜敷御通声奉煩上候。右ハ鮮抗州へ出張ノ為御返事延引苦々御託申上候勿々不展 龍平

七月十七日

向野大兄 御地方知巳諸兄へ宜敷御 奉上候。

この書簡には封筒がなく発行年が不明であるが、小村次官とは小村寿太郎のことであり、矢野公使とは矢野文雄のことである。小村は次官を明治二十九〜三十年まで務めていた。矢野は明治二十九年に外務大臣の大隈重信の要請で清国特命全権公使に就き、二年間北京に滞在し、日清戦争後における清国外債

借入問題を処理した。したがって、この書簡は明治二十九年か三十年のものである。実は、明治三十年七月十七日の『白岩龍平日記』に、

七月十七日 発信向山・小村・大石・岸田・河原・黒崎・秋山・向野・佐野・井出・宗方・守田・小川・中西・細川・前田・根津・村山帰京。(二五四〜二五五頁)

と、確かに記されている。この書簡はまさに明治三十年七月十七日のものである。向野堅一は小村を通して矢野に何を頼もうとしたのだろうか。

その手掛りは、『統対支回顧録』下巻所収「河北純三郎」のなかの「筑紫弁館はその後、経営難に陥った」という記述にある。日清戦争後の一時的な好況で財界も大いに業務を拡張し、金融業は多額の手形を振出していた。しかしその反動が訪れ、金融は逼迫し、銀行は貸渋るようになった。特に、中上川彦次郎が率いる三井銀行は九州炭鉱経営者すなわち炭鉱業者・麻生太吉や貝島太助に貸付けた金の回収に乗り出したほどである(砂川幸雄「中上川彦次郎の華麗なる生涯」草思社、一九九七年、参考)。

『安川日記』において、安川と三井の顧問をしていた井上馨との接触が多いのも三井銀行の融資問題と無関係ではあるまい。筑紫洋行もこの日清戦争後の不況の煽りを受け、経営不振に陥り、その打開策のために新たに天津に商品陳列館を設立しようとしたのではあるまいか。向野堅一宛ての矢野の書簡から推測すると、不況はすでに明治三十一年から始まっていたのかもしれない。されど彼らに融資する銀行があったとは考えにくいので、九州の炭鉱業者たちに融資を依頼したと考察できる。そして、準備が整ったかどうかのとき、義和団事件により、戦場の場となった東交民巷にあった筑紫洋行は全焼し、この計画は頓挫せざるを得なくなったのである。

「郷土直方」

直方郷土研究会会報 第三十九号

発行日 二〇一四年(平成二十六年)四月二十六日
編集発行 直方郷土研究会

〒八三一〇〇三六直方市津田町七―二〇

直方市中央公民館内

TEL〇九四九―二五―二三二六

加入者名 直方郷土研究会

郵便振替
口座番号
印刷

〇一七四―八―三一八―三三

フジキ印刷株式会社

飯塚市伊岐須四九〇―一五